



1枚の写真から

「言い出しっぺ」の責任でしょうが、本企画のトップを飾らせていただくことになりました。一読者の立場から見て、気軽に読めるコーナーが1ページくらいあっても良いのではないかという素朴な提案から、この企画が始まりました。1年間の時限企画ではありますが、好評であれば継続されるかもしれません。ということで、「言い出しっぺ」としては知らずに肩に力が入ってしまいます。

でも、実のところ、エッセイなど書いたことがないので、「さて、どうしたものか」と思案に暮れているのが本音です。“分析化学”に関連する堅苦しい内容では、談話室との区別がつかないし、かといって分析化学会員の読者が興味を引く内容になると、やはり、多少の“分析化学”の雰囲気があるような気もするし……。ということで、引っ張り出してきたのが1枚の古い写真です。(もしかすると、これって、エッセイの常套手段だったりして)

この写真、昭和40年(1965年)の正月に撮影されたものです。場所は、群馬県の富岡です。筆者の持っている最も古い写真です。昭和40年正月というと東京オリンピック(昭和39年)の興奮さめやらぬときで、まさに日本が経済成長をひた走っていた時期だそうです。“そうです”というのは、筆者(写真中央部で男の人(筆者の父)に抱かれている)はまだ1.1歳だったので記憶にありません。せっくなので写真の説明をしましょう。右端の着物を着て赤ちゃん(筆者のいとこ)を抱えているのが、筆者の叔母で、この写真は彼女の夫(筆者の叔父)が大阪から里帰りしたときに撮影してくれました。服装の比較から、高度経済成長の豊かさを享受している都市部の人と、まだその豊かさに浴していない農村



写真 昭和40年代の群馬の農家(昭和40年1月撮影)

部の人との対比としてみても、面白いかもしれません。

写真を撮った叔父のところはサラリーマンと専業主婦という典型的な核家族です。片や、筆者の右が母そして左端に筆者の祖父母が写っているように、筆者の家族は農村部の典型的な大家族でした(余談ながら、その他はすべて筆者の兄と姉です)。農家の場合、今も昔も女性は重要な労働力です。ということで、農家(などの自営業)は男女共同社会参画の典型かもしれません。祖母も母も働いている中で育った筆者には、男女共同社会参画という言葉に違和感を覚えます。

さて、この写真の背景を見てみると、後ろのトラックに「蒟蒻(こんにやく)商」という文字が見えます。筆者の家は蒟蒻農家でした。蒟蒻栽培には、ボルドー液が欠かせません。これは、硫酸銅と水酸化カルシウムの懸濁液です。夏になるとボルドー液作りを手伝わされます。どんぶり一杯の硫酸銅の結晶をドラム缶(上部の蓋を取ってある)に溶解し、生石灰(CaO)の消化反応(バケツでやります)から生成させた水酸化カルシウム懸濁液を混ぜ合わせます。今の研究室の実験と比較すると、 10^3 以上のスケールの開きがあります。今、小学生にこんなことをさせたら、大変なことになるかもしれません。よくドラム缶の中に落ちそうになりました。

秋の終わりに蒟蒻は収穫になります。小学生低学年だった筆者の仕事は、蒟蒻畑(こんな名称のゼリーがありますが、本社工場は写真撮影場所のすぐ近くにありますが)から、枯れた蒟蒻の葉をかき集めて火を焚くことでした。日が暮れかかり、寒くなった頃に火を起すのですが、ボルドー液が付着した蒟蒻の枯れ葉を燃やすと、夕暮れ時に緑色の炎が燃え上がり、夕日とのコントラストがとてもきれいだったのを今でも覚えています。4歳上の兄が、銅の炎色反応のことを教えてくれました。でも、畑に撒かれた銅がその後どうなっていくのか、については答えてくれませんでした。今でも気になっています。どうやら、この辺りが原体験となって今の仕事についているようです。

百姓の息子が大学の先生になったことを、尋常小学校しか出ていない亡父は喜んでいました。自分も“成り上がり者”度としては結構なものかと思っています。でも、名誉会員のG. D. Christianは55年会の推薦講演の中で、彼も農家の出身だと言っていました。上には上がいるものです。

最後に、今回のエッセイは火原先生(東京大学)にお願いしました。乞うご期待。

(宇都宮大学大学院工学研究科 上原伸夫)